重修真書太閤記

八編 一

ヘ13
459
72

門 459 巻 72

重修眞書太閤記八編巻之四

魚津諸將評定の事
并中条越前守軍慮の事

柴田勝家溝口半左衛門尉を使として信長の仰の趣をもつて景勝の上洛を勧めけるにより魚津の主將吉江織部正諸將を集めて評定しけるハ勝家此際より數度當城に向て合戰を挑みながら今また使をもつて合戰を余所にし我君の上洛を勧むる条甚もつて不審なり是返答何として然るべきかんや面々心腹をのこさず述らるべしとありしかば河田豊前守龜田小三郎四坐を

見舞し何かに先達て發言せる条失禮かぎりなく候へども既に評定の席にて斟酌更に其詮なかるべきまゝ愚案を申べく候半左衛門尉とやらんが處責し申さばに聞え候へども全く以て偽にて候べしその故は當屋形家督ありてより四年その際名代を以て京に出仕し將軍家に鷹馬を獻上ありてゆへぞ上杉代々の國役に於て闕如せし處なし然るを四年以來無沙汰といふたゞしその四年の間屋形上洛なし給はずて使節をのぼせ上られ候事更に屋形の怠慢と申べからず天正六年七年八年までは重服といひ國中の内亂ありて上洛し給はず九年は屋形上洛のため越中まで出馬ありし處佐々内藏助

神保長繼等路次を妨げ候により引返し給ひし也今年春は雪深くして出馬に及ばれず此頃上洛を企て給はんとすれば早かくの仕合なりさもあれば屋形の國務に於く遠慮にも武命にも背かせ給ひし事なし然るに如樣の妄言を以て我々を怖し其間に此城を襲ひ取べき謀と覺え候もしくは半左衛門尉とやらんに城内の役所々をよく見をその後城門より追出し給ふべく覺え候と憚る處なく申ければ名田橫田の二人すゝみ出て河田殿龜田殿の仰の趣最其理は聞えそ候へども勝家如是く申て後此方の返事の色によりて違勅として信長出馬せんとの前置とおぼえ候左候へば此御答ぶりによ

ず忽ち大敵を引受申べきにて候此春武田殿の滅亡いたされ候時も始ハかくの如きことを申て様々にたぶらかして候信長の表裏ハかくの如く今にはじめぬ事に候能々御勘辨ありて然るべく覚候と申ければ竹股三河守いづれもの論義一々その理明らかに聞え候但某が愚按にハ勝家長陣に兵粮玉薬乏しくなりし上此方にて屋形の歸陣ましますからにて此城中の侍を棄ごろし給はんとの御あつかひなるべしさる情なき大将を籠城の侍どもさぞかし恨候ひなん然らバ加様の方便の妄説をなして面々の心を動かし其虚にのりて謀を施さんとの意なるべしよしや信長まさに出馬なくハ一應も二

應も此方へ使者をさしこし三言四答てのちにこそあるべけれバまづ一度も信長より何とも申越候をなく直に此方へ向て出馬實に心許なく候されバ手切の挨拶をなし給ふとも決して信長の大軍左のみ急に下向ハあるまじき也よしや大軍にて下向あらバ下向ありし時に臨でともかくも計ハありぬべしいまだ信長の旗をも見ずしてこれに怖れんを越後侍のうへにいまだ聞も及バず候然とて長評定ハ其詮なし西にも東にも死より外ハ大なる論ハなく候間はやく使者を御返し然るべく候と申けるにより吉江織部正各々の異見いづれも道理に當りて候去ながら三河守殿のいそ

なる趣ハまさに敵の肺肝に分入し如く奥深く覚え候何
さまに敵謀を以て申通じ候上ハ此方も亦謀を以て返答
仕るべし因て某が存ずる處ハ勝家の申越候通り景勝
上洛仕候様に急度申遣ハし申べく候因てハ最早合
戰に及び候まじ左候ハゞこれにて各々御歸陣候ハ如何と
申遣ハべく候と申義に決着し其通り半左衛門尉に答
へしかバ半左衛門尉立返り勝家に申べく候とて互に式
代して城門を出けるが暫時ありて半左衛門尉また出
來り再度入城し横田を取次にて申けるハ吉江殿の御
返答の旨を以て勝家に申聞てハ勝家實に以て祝
着仕候侍の御詞に候へバ偽ハ有まじく候併勝家にハ

ざ吉江殿に一面の好ミもなく候吉江殿もまた勝家を
知給ふべき筈なく候因て勝家その御城に入て吉江殿
に面會仕るべく候去ながら今迄弓箭を取し中なり互
の疑心を晴し申爲に候間勝家が秘藏仕ある候子息三左
衛門勝定を人質に進じ可申候但兩家一和の上ハ其御
城を勝家に渡し給ハり候べしと云バ横田此由を以て
披露せしに中条越前守これを聞て勝家が謀略大かた
露顯して候其故ハ當城を借るために子息を人質に遣
さんく候と申越候へども誰がハ三左衛門勝定を見知
て候名もなき下臈に三左衛門尉と云名を名乘をせてさ
し越候ならんを我等が心にも覺えありされバ此人質

を詮なきことに候然ながら勝家が入城せんといはん時はおとなしく二の丸を休息所にかし遣し二の丸にてのどやかに打緩きたらん所を見て此方に謀畧は候べし然ば敵謀を以て我をはかりたに用ひ候とも何の弱をかり成候べき何の痛みかあり候べき半左衛門尉に口状の趣承り届ては御勝手次第に御入候べし二の丸を借進じ候間彼處にて緩々と休息あるべく候其上にて本丸に招請申べく候と御返答然るべし然して後宮崎の衆へも申通じ勝家が謀あつて入城したらん處を見すまし火箭を以て二の丸を焼立る間烟を相圖に宮崎の衆も手を合さるべしと申遣し内外一度に取掛

候はゞ勝家を打取候はんを容易なりなんたゞし勝家と名乘て入城候ものを能々御見定め候べし若くは名もなきものの小柴田修理進と名乘らせて入城させ其跡より眞の勝家出來て候て當城を一息に攻落さんと謀るかも知べからず我等が往昔三条を責取て候ひし時も左様にきゝしを御存知の上なり傳へ承り候なれば今の信長が父の信秀名護屋の城を取候も城主と懇志になりし年始の禮とて名護屋に來り勞れたるとの候へば二の丸をかし給へと云て二の丸に入て休息しけるその内に所勞以ての外なりとて打臥しかば名護屋の本丸より醫師を遣し様々とあしらひけるうちに今は限りと

なりぬる由聞れバ内外とも心を安くしけるにかくして本復あれかしなどあつかひしかども信秀が親しきものども追々みまひあつまり看病のためとて郎等ども多く来り會しころ俄に本丸に向ひ鐵炮を打かけ火箭を射さ一時ばかりに名護屋を取しとかや是らの謀に似よりて候へば更に御油断あるまじく候と申けれバ吉江兄弟も實もしくと同心し其趣を半左衛門尉に返答しければ半左衛門尉も大に喜びかゝる使者に立候をなさんバ我身の面目なりとハ申ながら仕宦なりゆへぞ命を棄べきにかゝる事整ひなバ半左衛門尉が命生て候昔の半左今の半左衛門尉と一人が二人になり

て候と會釋して坐を立バ横田常陸介これを大手の城門まで送り出し門の際にて式代して立別れける吉江兄弟より宮崎の齋藤下野守をもつて畠山が許へ城中に火の手あがらバ寄給へと約束の使を立させのち二丸を掃除し柴田が来るを待たりけり

此段流布本ハ越後に亂起て景勝歸陣あり付てハ吉江兄弟始め歴々いづれも歸國ありて主人の用に立給ふべし當處の者ら人質を進上いたし候間それを召連られ本國へ引返し給へ魚津の城をバ勝家あづかり申べし自國の和平のうち人質を御返し候はん時此城をも返し申べしと約束せし由なれども上杉

方に傳へし記録にてハ魚津城内へ勝家を入しとも
なく人質のこともなし全く異説と聞ゆ今爰に録する
處ハ能登の畠山の記の趣なり

勝家謀なく魚津城中へ入事
并越前守計策相違の事

溝口半左衛門尉立返て城中にて吉江兄弟に約束せし
趣を勝家に告しかバ勝家大に喜び越後侍弓矢を取て
ハ並びなしと覚ゆれども思慮浅くして上方武士の偽に
なれしに比べては雲泥万里といふべし然らんにては
早く人質を贈るべしと其用意せらるやといひけるにより
半左衛門尉大に驚き人質なくバ三左衛門尉殿を御遣し
候なん由の仰にて候故その通りにてハ候へども三左衛
門尉殿ハ今程北庄におはしまさればそれを迎へ奉らんと今
日明日のことにはなりまじさらば御迎に某罷越
可申候といへば勝家聲をひそめ半左衛門尉音たかし
三左衛門ハ勝家が身にも代がたくおもふ者なり何と
て人質として敵へ遣はし可申やといふにより半左衛
門尉たゞちに三左衛門尉殿をと御諚候ひしかば吉江
兄弟にても其由申ては然るに三左衛門尉殿御出なく
候ては此御一儀整申まじくその上半左衛門尉虚妄を
申て候といはれては世に立まじるべくも候はず御暇給へ
子で候へと申も果ず鎧の上帯引わときさ腰の刀を抜たか

し腹を切んぞ有様に勝家も仰天し半左衛門に組付に
つ刀を奪取其方その性質ゆへ此度大事の使を勤めて
大切を成就せり只今三左衛門尉をとく呼寄べき也
かなしみ驚くことなかれと口がためして勝家内處へ入
浮見小才次を呼近付その面をまもりて打長目さてのち
似たりな能も似たるものかな父が眼にありけれど
人もさあそおりからめといひそそく小才次を一間へ
よび入汝ハ其ぞに腹切すべきものなりしを今まで存
命させしも我その方を用る處あるべしとおもひしが
也然るに只今汝を用ゆべき時至れり我為に命をすてゝ
くれよと申ければ小才次すこしもわるびれず畏て候

誰々の命も元來君にさゝげしものなれど取つけ其が
命ハ殿に奉りしをすでに一両年の前かの今日までい
き延びしをなれがけの事に候ちし何事かは共御下知
の通り更に背くべきに非ずと答しかバ勝家かしこなら
の櫃より帷子取出しこれを衣を袴をそなへせ陣羽織を
きせ刀も太刀も柴田の家の紋付しをさゝせ是より其
方柴田三左衛門尉勝定と名乗溝口半左衛門尉と共に
魚津の城に入て質となるべし魚津の預吉江織部正さ
てハ河田豊前守中条越前守など上杉方にて歴々の侍
なれば半左衛門が口状に從ひ只一度の談判にて事決
着せしハ不審第一なり定めて城中にても計策あるべき

也然らバ人質として入城する其方も必定切死とおも
ふべし左ては今日只今を以て汝ら死せし日と定め故
郷へ申遣しく候ひ南あなかしこ能せよといひ含めし
かバ小才次涙をながし重恩の上よ復御恩を蒙ることの
年月御側よ伺候し今また三左衛門尉殿の御名を許さ
せ給ひ敵城へ入候を此身よ取て莫大の面目何ごとか
これよ勝り候べき仰よ従ひ十分よ擧動叶はぬ處にて戦
死仕候はんを武士の冥加いかばかり嬉しく難有く
存じ奉る由答へけるなり然バ城入の手配をべしと
て佐々内藏助を先よすし先て二の丸を請取と前田又
左衛門父子なる宮崎のものを喰留べしと定め佐久間

玄蕃徳山五兵衛佐久間安次同源六ハ勝家の先よ立て
二の丸の口に扣へさせ其次に溝口半左衛門尉柴田三
左衛門尉を召具して本丸の門の前よ進みけれバ横田
常陸介立出城門を開き半左衛門尉殿こなたへ御入候
へと云にられ半左衛門尉本丸よ入三左衛門尉をさし
招き横田殿御約束の通り勝家の愛子にハ三左衛門尉
勝定を御渡し申候御受取あるべく候但人質の事にハ
へバ太刀刀を取て御渡し申候と云ながら三左衛門尉
が太刀も刀もこれを脱を横田なうさしけまで横田こ
れを請取左まてなくは共然るべく候折角の御志なれ
ど無刀にて吉江兄弟に御面會候べしそのうち直よ御

渡し申にぞ候べしと式代して本丸へ同道し魚津の城
方にても吉江喜四郎名田釆女二の丸より立出佐々内
藏助を招き會釋し柴田殿今日當城へ御入織部正をは
じめ一同に御對面の上いよ〳〵和睦の儀御取結び越後
越中御互に音信を通じ候ならば民安く國豊かに太平の
化を施し候はんを何よりの喜び入て候就ては御休
息のために二の丸を御貸可申旨に候依て見苦敷住あ
らして候へども只今御渡し可申候是へ御入候へと申
ければ佐々内藏助進みより式代して名田吉江と共に
二の丸に入役所〳〵を受取ければ継いで佐久間玄蕃
下にも二の丸に入まゐらせける此折ふし時節なればバタ

立雲立そより東西風吹出しければ時ありと火箭
を射出んとひしめきたるところ佐々が手より手過のふ
ありて火をさしけるにぞ忽ち黒烟天を焦して燃上る本
丸おそるゝ是を見てあるゝ不思議柴田當城へ入やいなや我
休息を焼立て何とかせる何にもせよ此方よりも火箭
を射よやといふまゝに散々に射かけたるに二の丸を
早黒烟立ちのぼり猛火の内より柴田勢面もふらず切て
出る本丸よりかけける上杉勢此体を見て劣らじと打
て出て手を合せよと云まゝに逸雄の若者ども鎗先をそ
ろへて突ていづ此騒ぎに人質の柴田三左衛門尉番人
の刀を奪取て是を斬倒し當るを幸切立て走り廻る名

田釆女正これを見て我預りの柴田三左衛門尉なくさ
も悪し一討にと太刀を拔くちゝり掛る三左衛門尉ハ
とても切死と思ひ定めし處なれバ飛鳥の如くに働き
けるを釆女正何とかしけん右の腕を切おとされたゞ
よふ處を三左衛門尉得たりとのりかゝりて押ふせて首
を取吉江喜四郎傍よりそこ退そと聲掛て四尺あま
りの大太刀を以て三左衛門尉に渡り合えいと一聲さ
けびもあへバ三左衛門尉が肩先より乳の脇まで切た
てらしかけしも猛き三左衛門尉もそのまゝ倒れふし
喜四郎大音あげ勝家が一子三左衛門尉をバ吉江喜四
郎が打止たるぞとよばゝれバ柴田が方にもこれを聞

あなかそれや浮見小才次ちや討れしかと云聲なれと
上杉方にも不審をなし吉江喜四郎が討しハ柴田三左
衛門なるを浮見小才次といへるハ何故ぞといふなどに
柴田が手の者口々に哀れ剛の者也まさ其面影の三左
衛門尉殿に似たるをもよ誰人かそれなるは非と云ものハ
らんと語るを聞て扨こそ中條ハよく云たりけりと皆
人ありひ合をさうり中に時うつるほどに勝家をちゞめ
佐久間徳山佐々思ひ〳〵に働けバ上杉方多くうたれ既
に本丸へ乗入んとひしめくを河田豊前守繁綱龜田小
三郎中條越前守定知吉江織部正泰常などかくあらん
と兼て期したるをなれバ面もふらず防ぎ戦ふ宮崎の

りのぼりか魚津の火の手を見つけゝれども黒烟たびさ
だし相圖の烟とおもへれど然ながら出張して事の様
を見よとて畠山彌五郎石動山城守實俊齋藤下野守
季信をさし二千餘騎我先にと來出し魚津後詰に打
たりけり
魚津の城を柴田に渡さし由に流布本にいへるは誤なる
ヿ

重修真書太閤記八編巻之四終

重修真書太閤記八編巻之五

佐々内藏助魚津本丸を焼事
并吉江龜田信義を守て戰死の事

上杉方織田方の諸將互に孫呉の秘せる兵機兵法を意
に得たる上なれバ攻るも防ぐも透間なく然るに佐々
内藏助成政まづ二の丸を焼破て其勢に來て本丸を
焼んと鬨を作りかけ短兵急に攻つけしかども上杉
方にて河田豊前守繁綱中條越前守定知をかねて期し
たることなれバすこしも騒がず火箭を射まバ水をかけ
東勢に火を付て投るをば踏消てこれを防ぎ能敵と見

是ハ組ぞこれを討今日一日の命よ早く討死して名を
後代に残せよと馳廻て諸軍をさゝげまし八方に當り
て力戦せり中にも河田豊前守ハ吉江喜四郎泰時と兄
弟の義を結びし中なれバ死生ともに一途とおもひ
極めけれバ敵多勢にて取かこめども是を恐れず切く
ハ突々てハ切上段下段千變万化秘術を盡して戦ひな
がら河田と吉江と會てハ離れてはまたそひ又面を合せ
火花を散して戦ひけるが馬かけするぞ大音上元ハ駿
河國の住人岡部五郎右衛門定幸が弟今ハ越後國の住
人河田豊前守繁綱なり我と思はん人ハ近よりて我頸
を取れとさけびて馳かゝりしかバ柴田が手の者二三十騎

我打取んと群り來る豊前守これを見て天晴武者や己
等が分際にて繁綱が首をとらんとハ慮外なりいで冥
途の案内に召連て呉んと云より早く眞先に進みし武
者二人を左右に切ふせ罪つくりとハおもへども我等
一人死出の山を越かゝれさびし閻魔の廰まで同道せ
んとのゝしりて切拂ひくしける太刀さえてまさしく
ひまに十七八騎ハ切落され殘るもいづれも棄捨打て
引てゆく豊前守これを追掛ながら吉江ハいづくぞ
喜四郎ハと八方に眼をくばりつゝ戦ひけり吉江喜四
郎もかねてより河田と一つ處に打死せんと約束せし
上なれバこれも河田を尋ねて切て廻る河田と吉江と

只二人に切立られ織田方すこし白けて勢のさゝける處より見すかせば焔々ともえ上る猛火の影に只一騎赤になりて戦ふを誰なるらんと能見れば吉江喜四郎七八人を追つまくり切合たりかくと見るより豊前守つと馳よりてかのをもいそぎ向ふ敵を切ふせ吉江喜四郎いまだ無事かと聲をかくる吉江もきつと振かへり河田豊前守おなじくいまだ死なれぬやといへばさればこそかねての約束なるを以て多くの敵を切はらひ切ちらひ御身を尋ねしに宿世の奇縁かゆくりなく爰にめぐりあひし嬉しさよ御身が兄の織部正殿は既に戦死となりそれより今も雑兵どもを何ほど多く討たり

ども其詮なしいざや同じく死して冥土までも同道すべしと上帯脱きて鎧をぬぎ兩人芝生に坐をしめて互に小手に手を取交し差違へてぞ死したりける横田常陸介は老功の勇士なれバ態と異様に出立たり素肌の上に兜ばかりを着してぞ脊馬小打乘太刀を打ふりて大勢の中へ切て入柴田勢これを見て天晴武者ぶりめづらしく誰にて御入ぞ名乘給へと口々に問れて横田は馬かけすゑ是ハ上杉譜第の侍に横田常陸と申もの也年つもりて六十三才軍に逢事七十餘度されども一度能首とられ雑兵ながら六七百ハ切てすて候ひぬめりん今日ハ最期の合戦なりせめて織田殿の御内にて名

ある方を一人なり共討取ならバ死手三途のよき道連にさせ給へと大音によばゝりしかバ柴田が勢も興がる翁の云条かな我討取んと七八騎面もふらず切かゝるに老武者なれども度々の場數を經たる横田なれバ討も切も仇ならず駈向ひし若武者ハ多く手を負ひなそゝと引退て息を繼横田あまりに打合て太刀を編木の如くなりしかバ
打太刀もさゝらとなりぬかなかくハ太鼓の胴を切よしもがな」と志はがれ聲にて歌ひつゝ又もや敵にあたんとて東西に切めぐる柴田が勢のうちより二三十騎うちかゝり此老武者を生捕て度々の武功をなしゝを

聞ながらと進むを見て横田からくと打笑ひ孫とも見べき人々が殊勝にも見え給ふものかな是へ近寄給へ我初陣より此手柄のほど語て聞せんいざくと呼たりく打太刀風ハ木枯の枯木に似たる腕なからさすが老功をきゝまをうけて空にせん大勢なれども近付えざりしむらむらたつと引退く横田ハ是を見ぬふりにて搦手をさし馬をすゝむ佐久間久左衛門尉これを見付いかに横田殿いづくをさして落給ふぞ城の外をバ佐々前田の勢をもて幾重か圍ぐにぞ偖ハ遁れ出べきすべもなしし不識菴どの調練給ひし侍が迹しといはれて恥見んより某に首を渡し給へやと聲をかけられ常陸介取

そふく〳〵し柴田どのゝ親屬の佐久間どのとこそ聞なれ面をあはせ今日はじめて御邊の首を給はりて閻魔どのへのよき手土産參りせんといふより早く切かけし刀の電さらりときらめきせば佐久間が馬驚いて跳まはる佐久間は馬を乘靜めんと片手綱片手打にぞ戰ひける横田が馬は馬ぞひ洒しく是も同しく躍てびあがりしを片手打佐久間は壯年力強く大拂に拂ふ鋒に横田高股きられて鐙を踏外しを馬にかどら程く眞逆に落てゆり落るを大勢折重なり生捕よせんとひしめくを常陸手をのべ一人の武者を引抱へ刀の柄を取直しうんと一聲さけびながら差貫きて死し

てけり何さま上杉謙信の仕ひし武士は格別と柴田勢も佐々前田が兵もおしなべておそれぬものは無りけり城の預かり吉江織部正恭常は今日を限りと思ひ切し白糸の鎧に同じ毛の三枚兜を猪首に着八寸にあまる黒き馬に淺黄の厚總芝打長に引かけ青貝の鞍に深分の手綱三尺二寸の太刀を佩十文字の鎗を取能敵もがなと見廻したる處へ佐久間が郎等千倉與市五十嵐忠内左右より討てかゝるを乘違へさま横に打たる太刀鋒に五十嵐きられて倒れふせば與市は眞向立に切てられそのまゝ息は絶たりける玄蕃はかくと見るよりも馬を進めて吉江に向ふ吉江も佐久間と見てければ

願ふ敵と馬かけ並べそれなる者ハ佐久間殿か見参
せずや物その数ならぬ者ながら当城の本人吉江なりと声
かくれば玄蕃も馬を進めていかにも佐久間玄蕃なり
と云すてゝ四尺二寸の太刀を打ふり切こむを十文字
の鎗にてなんなくはねのけられて玄蕃允大刀取直
して突かゝるハりつと開てちやうどを打太刀秘術の天眞
正鎗に習練の直横斜いづれも得たる上なれバ龍虎の
争ひ目ざましく中々ともすれバ玄蕃允請身になりて
危ふしと見るほどに玄蕃が弟の佐久間源六九尺ばかり
なる素鎗を取て駈もどり吉江ハかくと見るよりも敵
をバ左右のものと為し突てハ右に引て突一往一来

電光石火更に間なき合戦ハ世にめづらしき有様なり
然るに吉江ハ今日限りとても生べき命ならじいかに
しても此代にながらへじと思定し上なれバ玄蕃源六
が打太刀と鎗を餘所にうけ流し馬より下て長閑に坐
を占腹十文字にかき切俯に伏て死したるハ實目醒し
き勇士なりと感ぜぬものこそなかりけれ去ほどにけなげ
く寺嶋六蔵馬をバ既に乗捨て歩立になり太刀打し
て多く敵を討けるを前田が家人篠村志摩なるが見
付能敵御参なれ是ハ我等が得物と鎌鎗取て差寄
六蔵ござんなれと見るより篠村志摩めがけしや寺嶋が冥
途の旅の道連と云もあへず太刀ふり上てちやうと切

力ひつゐて篠村が鞍の前輪を切かゝりたり篠村なと左へもぢりし鎗取のべくかゞと突あゆませず寺嶋が胸板ふ當れバそのまゝ倒れるがゞふ太刀取直し我と我首かきおとして死してなり龜田小三郎直純ハ寺嶋に継いて働きけるか篠村と元ハ縁者一入目ざましき軍せでハ死しての後の恥辱なりとても生んとおもはねバ敵をバ更に擇ぶまじ太刀の目貫のつゞくたけと飛鳥の如くおし廻りてかゝとぎけるがさすがの能敵にあらざればに日の丸かきたる扇開きて敵に向ひ上杉家の侍ふ龜田小三郎なり討て手柄にし給へと呼ハ八尾伊平太谷村丹下と名乗りて相近づくを小三郎待設けたる太

刀をぬきもちしと切るに谷村丹下まつ二ッふそ切れさり跡より進む伊平太が細首中に打落を篠村志摩ハ亀田と見て聲をかけしかバ龜田も莞爾と打笑ひ鎗をおごひくかけ向ひまさし戰ひけるが龜田咽輪のちづれを突れ馬より落れバ篠村継ひく走り寄首を取て立上る處へ駈來る竹股三河守此有様を見るよりも前田が家の篠村志摩遁さじと天野了觀が鍛ひし大身の鎗にてぐざと突つらぬき篠村太刀引抜鎗の柄をきりつけときまじバ三河守もろをきバ太刀をふり上て志摩が首を打落し猶も進んで走り行

竹股三河守中条越前守自害の事

并魚津落去宮崎勢後援の事

柴田勝家が奇計により魚津の城に入上杉方の諸將を謀りけるに其策よく調ひ魚津に籠りし上杉侍河田吉江兄弟亀田横田寺嶋なりひくふ討死しけるに中条越前守竹股三河守よく戰ふといまだ死せずその上世に聞へたる勇士といひ然も軍略殊勝にして敗軍をまとげまし残兵をたすけ死ものの狂ひと切て廻るほどに柴田が手のもの多く討れしより勝家これを見てかくありて荒に荒たる荒武士を早く討んとせば多く味方を損じてはその益なし只遠巻に取こめ疲らかして其後是を打べしと下知しけるにより竹股中条競ふて進めども柴

田勢あながちに是に迫りもせず一向二人を取こめ丁と打てかゝらず逃追ひ返しつせしほどに去べき武士にも逢もせざれバ口惜雑人原を何百人討しとて更に無益の骨折ぞ許く敵に逢ばやと思ひ付手負し風して膝を突首を低く居たりしを勝家ちかけよりてあなやや竹股手を負しかといふ聲聞と立上るを是ハ上杉の竹股三河守秀重に柴田殿に組ばやと走り近づくを見て溝口半左衛門かけ塞り鎗を合す三河守ハ柴田を取逃し怒れる眼に血をそゝぎ溝口が綿嚙とりて投すてし是ハ能州七尾の城に於て鬼といはれし温井越前守を一鎗に突伏たりし竹股が只今自害する体をさしかゝに見

よゝと呼はりてのち
阿修羅王にもおとらぬありさまを生ながら取ん
勝家が首と二三度くりかへしよく詠たるぞと自讃
して太刀取直し頸にあてゑいやとかけし聲とともに
首かき落し死してけり中条越前守定知も竹股と同じ
心に勝家目がけて走りめぐれど終にめぐり合ねバ今
は自害をすべけれど同じく死さバ名ある敵に打合て
こそ死べきと思ひかへしてふたゝび柴田が勢に
駈むかふ然ども勝家諸将に下知して間近く寄しめバ
是ハ遠々と取圍ミ敵疲らして討ん謀りぞあり越前守
はやくも勝家が計策をさとり鎧の袖草摺を切て棄太

刀を肩に打かけて一方の透間より落行体にあらハれ
バ佐々内藏助のがすまじと追かけるを越前守ござ
と見ぬふりにて足を早め行バ佐々も強て追かけバ徳
山五兵衛が手のもの共是こそ中条越前守我打とらんと
馳集りて道をふさぐ中条立止りて己等ハ何ものなれ
バ中条越前守を打もらさじめんとおのれぞよ間近く寄
ぢ死手の山の案内に立て呉んぞと大音にさけびつゝ
鎗取直して突かゝれバ徳山が勢共はじめの勢にハ似
もつかでもらくらくと迯去つ徳山五兵衛是を見てさ
たいふし物共いで我打取て見せんぞと手綱かいくり来
出し中条にかけ向ふ中条徳山を待うけてやさしくも

見えたまふものかは御身ハ徳山五兵衛末代の能武士を定知が手にかけ切て捨んもかはゆけれど軍の習是非もなしと言つゝ太刀を抜ざし打てかゝれバ東路但馬國塚助兵衛横合よりつとかけ塞り討てかゝる越前守是を見て命知ずの愚癡ものよいで中条が手にかけん三途の川の瀬ぶみせよといふと見れバ両人ハ四つに切れて死してけり五兵衛眼の前に郎等二人切ふせられ悪し中条一足も引せじ引ねと聲ふるはし十文字の鎗提て突かくれバ中条望む處と太刀を以て付入く切結ぶ北國一の荒武者と北國無雙の武功の侍馬上と歩立追つまくりつ切合さま鬼神と鬼神の爭もか

くやあらんと目ざましくかゝる處へ誰が射しとも主知ぬ流矢來りてそ中条が兜の眞額より脳をくさひてのぶりに立さしもに猛き越前守も急處の痛手にすこしもこらへず倒るゝ處を徳山馬より飛下かけよりて首をとりぬ魚津の城の大將分一人も殘らず討死して城ハ忽落にけり勝家ハあちかしこに燒のぼる炎をしるし勝鬨をあげ給へバ前田佐々の陣々にても同じく鬨をあげせけり此時宮崎に屯せし後援の大將畠山彌五郎義春齋藤下野守季信石動山城守實俊等ハ追手をさして馳付見れバ前田又左衛門父子柴田伊賀守逆茂木引て人數を配て静まりかへりて嚴重に備へけれバ勇猛無ぶ

雙と聞えたる齋藤も石動の容易に切てかゝるべきに
あらざれバかくして是をおびき出して討てんものと
鐵炮を打かけしかども前田又左衛門かたく制して打
出ざれバ彼是とするうちに城中の烟も静まり勝閧の聲聞
えしかバ三人ともにせんすべなく宮崎へ引返し越後
へ早々注進したりけり
上杉三代軍記にハ五月中旬より魚津の城兵粮尽大
敵にふせぎかたき由を注進せしかバ景勝自筆にて食
乏しきに付敵方へ和睦を入城を渡し越後へ引拂ふべ
き由直判にて岩井源藏庄野瀬八左衛門魚津へ行此
書状をもたれ然るに大將分此状を以て評定しける

ハ敵に降を乞て城をわたし命を助らんを末代ま
での耻辱也とて大將分十三人居並び末期の酒盛あ
り竹股三河守蠟燭をともしゐたるハ兵粮矢玉藥も
尽たるを我々が運の窮なり古より歴々の名將たち
自害し城に火を掛その上面の皮を焼たゞらし誰が
首とも知ざるやうを計り給ふ是ハ本意にあらずとて
木札に各々名字を書付同時に腹を切のこる郎等ハ
敵にかけ合て戰死をとげて柴田城に入自害の体を
見景勝の自筆を見扨も上杉の家の士ハ前代未聞
と感じけると也是六月二日未明の事也と有

重修眞書太閤記八編巻之五 終

重修眞書太閤記八編巻之六

亀田小三郎老母自害の事
并光秀逆乱北國へ聞ゆる事

越中國新川郡魚津の城ハ永禄の頃椎名孫六同越中守の居城なり景勝椎名を討て此城を取吉江織部正をして是を守らせし也今此處をいふに町ハ凡十町ばかりて游女も有國人ハあり川と云上方へハ爰より二里にして滑川四里にして富山三里餘にて三戸田一里余にして中田一里にして戸出二里にして今石動三里にして竹の橋此間に加賀越中の境あり江州柳ケ瀬まで

五十八里余に及ぶ又魚津より二里を櫻井と云一里半
わたりて入膳と云二里卅町にして南保と云大塩津の橋
こより次を笹川次を宮崎村と云宮崎魚津相去る凡七里
許なりこの宮崎にも申して魚津の後詰と頼まれし畠山
源四郎義春齋藤下野守季信石動山城守實俊等魚津の
火の手を見るや否やそれや相圖と掛付たりしかども早
魚津の城落て柴田の勢入替る吉江兄弟をはじめいづ
れも戦死しけれバ畠山齋藤石動をはじめ宮崎へ引返
し春日山へ早馬を立て事の始末を注進し柴田が勢共
すはや寄よかし花々敷一戦して上方武士の肝を潰させ
んと鏃を磨て待かけしハ大膽不敵といひつべし春日

山にも景勝歸陣ありしより織田方の防禦如何せしや
定めて落城たるべしとハおもひながら吉江兄弟をは
じめ河田竹股龜田横田寺嶋以下十三人の大將たち定
めて城を明て歸り來るならんと心待に待れし處へ宮
崎より此注進に吉江兄弟をはじめ十三人殘らず戦
死せし由事細かに聞へしより景勝を始春日山に
有合侍大將いづれも仰天し然らバ織田方の軍勢定め
て雲霞の如く寄來るなるべしこれを防ぐこと容易な
らず此上ハ三國峠へ打出たりし栗生栗林以下をも呼
かへし本城の防禦第一になし給ふこと尤然るべしと評
定一決なりしかバそれぞれに脚力を走らせんとなしける

處へ栗生美濃守栗林肥後守の許より飛脚到来せり何事にやと驚きながら打寄て文箱を開くに今月廿七日同廿九日両度の合戦味方勝利を得瀧川左近将監同儀太夫が七千餘人悉くこれを追散し瀧川が陣處猿京を追拂ひ役所く一宇も残さず焼拂ひしに此勢に因て追掛これを責伐ばすぐ瀧川勢をバ國中へ一足も入立まじきなりとぞ書たりける景勝をはじめ一坐の諸侍大将衆いづれも色を直し然バ此手ハ心安しそれに付ても魚津表の面々いづれもく心を一つになし戦死せしを幾重にもあはれがりける次第なりと大将を始めふ悲歎にうしかバ甘糟近江守をはじめ大田切口へ出

張の外ハ都て宮崎表へ出陣し畠山齋藤石動に力を合せ柴田勢を追伐し十三人が忠魂をなぐさめよと勇をたちしが大田切口北軍立如何なも事急なれば甘糟を出張せしめさて後に出立しむるとも遅かりじといふ議に定まりなり吉江兄弟が妻子河田が一跡それぞれ恩賞感状の沙汰取々なりければみなくこれに喜悦の眉を開きける中に亀田小三郎が老母の事を傳へ聞こそあはれなれかのくより小三郎と老母とハ継母継子の中なれど恩愛慈悲の厚きを尋常ハ越たりしが此出陣の砌も継母が實子の妹聟篠村志摩が事ゆへに病氣と称して引籠りしを継母ハ早く思ひ付篠村が方

へ嫁入をなりし我實の女ならねどもなかれもせぬ中を
引とりけるに継子の兄が忠義をつくし死けるに兄の小三郎
は人も多かるに篠村と戦ひ遂に篠村が為に命を落し
篠村は又竹股三河守に討れしと聞しより其悪縁の因
果をいとゞ一間処に閉籠り継子と聟が菩提のため念
佛修行し居たりけるが一朝念佛の聲の絶しかバ如何
なせし中と障子を引あけて見ればあらなあやし老母は
白衣も血に染て見えしにぞ介抱すればまだやまぬに
咽のくさりを擲切て九寸五分を手に持ながら息絶く
中に久しかりへ硯のふたなる白き紙に墨黒く
なげくらしにゆめなるつゝか定めなきたびぞなるよに

ところとぞめしと一首の歌をぞ書てけり今年六
十二歳とぞ人々驚き様々にめそなせども詮方なくれ
むそれよりに後の業をぞいとなみけり篠村が妻ハあか
ね夫に別まても軍の様に依てふたゝび夫にあふをも
も有まじき世とおもひそねバ月日も立をまちそくてハ早
く軍の止よかし住なれし七尾の里の八重たゝみいや
さや敷く妹と脊が枕ならべて長き夜を互にかたりうか
たらせて憂かりし月日を慰になして思ひを晴けんと
そのめしをも徒に兄と夫に死なれせめて母をバ万
代といのりしあはれ今日ハ母さへ同じ刄の錆となれ心
の内乃やるせなく思ひ困じて取そゞろ生体もなく泣

なれしが別れし人ハ妻なれバ又遇べくも非れハ急度心を定めける丈に餘れる黒髪押切恩愛執着の家を出得脱離苦の門に入母ハ兄夫の無跡を弔ひなんとおもひけりせめてハ討つ討れたりし其處をも見ばやとて墨の衣に身をやつし檜の笠に竹の杖魚津をさして出行ぬ忠臣孝子慈母貞婦一門より出ることハ謙信公乃餘徳よと聞人袖をぬらしけるに夫に替りて宇佐美民部少輔定房ハ景勝難義の戰場をのがれさりし罪科によりて其身を殺し其家を絶し其子弟を流すべき定めなれども父駿河守定行が忠義によりて定房が長子兵左衛門が流罪をゆるされ其身三國峠にて瀧川勢を打破りたりし功により龜田小三郎が一跡を賜はりて龜田兵左衛門直行と改めその上に加恩の知行を下されしかバ龜田が一家のめんぼくハいふに及ばず宇佐美が親類までも大將の慈愛の厚さを感じけり然るに大田切口に打入たりし森勝藏ハ魚津表へ牒し合を柴田と共に春日山へ亂入せばやと思ひ早打の飛脚を立ける處に天正十年六月四日申の上刻柴田が陣處へ京より飛脚到來し息を切てやけるハ去二日に右大臣殿二条本能寺に於て明智光秀が爲に御生害中將殿ハ妙覺寺に御坐ありけるが二条御所に入御ありて同じく御生害と注進を勝家をはじめ利家成政いづれもあきれはてゝ言ので

に云得ぬ處なれバ森が飛脚も仰天し何といふべき詞
もなし勝家ヤけるハ右大臣殿中将殿御生害の上ハ信
雄信孝の兩君達こそ御遺跡なるべく殊に森勝藏にも尾
州清洲へ御参あるべし瀧川をも同道いれ勝家も今明
日の内に當處引拂ひ清洲へ罷上りゆくべしと謂中とて此
飛脚を返し偖のち勝家利家評定しけるハ敵方へも此
事定めて聞へつべし然らバ我々が當處を引拂ふときハ
跡に付慕ひ來んハよもあらじ是を防ぐにハ誰をか當
處に殘すべきと相談しけるに佐久間久右衛門安次同
源六眞政可然といふ義に決着し早々歸國の用意をな
したりけるが又大田切口にてハ越中の飛脚を待付てい

かゝる柴田殿ハいつの頃越後へ切入て手を合せ給ふべき
にやと尋るに飛脚ハ吐息をつき去バ京都の大變か
くの如し依て魚津表を引拂ひ尾州清洲へ會合との事
に就ても當陣の御方にも早々尾州へ御上りなるべ
く瀧川殿をも御同道あれと仰をうけてゆひし也と聲
を潜めてヤけるハ勝藏も大隅守も黙然として詞なし
やゝありて此事日數經バ天下に隱れあるべからず然
らバ尾州への路々に一揆蜂起して我々を打止んと計
るなるべし早く瀧川へヤ通じ同道せんとて重ねて飛
脚を上州へ立勝藏大隅守此口の退様こそ大事なれと
評定し何にもせよ弱け見せずと上杉方の新手は大將

甘糟近江守布施次郎左衛門志賀與三右衛門佐藤平左衛門等ハ向ひ十死一生の軍する体を見んとて夜の内に食を焚せ篝火を上杉方に向てその数多く焚つゞけさせけれバ越後勢もそれや森ろ掛ろけと馬の腹帯つよく結兜の緒鎧の上帯それ〳〵に取集め森を待んか此方より掛るべきかと評定すれバ近江守いや〳〵森ハ掛るまじ此ハ森が此手を引べき計策と知れりいかにと云ふ此方ハ向ひ篝の次第に薄くなりてハ是ハ人なき空かゞり火よいざや追掛分捕せんと下知する處へ京より信長生害ありしと告來る扨ハ近江守の云如く森ハ引取ハ相違なし進めや進めと下知しつゝ馬を駈

出しけれバ森が陣處ハ人かげもなし何の間に引取けるにやおそかりし悔しさを拳を握てそかゝり合甘糟が老練を人ごとに感心したりけり

柴田勝家越中退口の事
并上杉勢勝家を追ふ事

好事門を出ず悪事千里を走るとかや京都に於て信長明智が為に生害ありし由六月五日六日の頃ハ越後の府にも聞へしかバ景勝大に口惜がり今二日三日の事にして大事の侍大将十餘人を失ひ剰一城を落されしをよそにて跳て上るを悔しめどもその甲斐なしさりながら一刻も早く越中へ出馬して柴田を追討せんと軍

勢を催促しける處に杉原常陸介親則上野介顕光二人ハ謙信の頃より旧侍大将なりけるが景勝を諫めて申けるハ信長生害の事巷説なしていまだ慥ならざる沙汰を聞ぞめしや敵の謀ぞ如此をいひふらし我等に油断さするか又ハ呼出してこれを討んとの事ならずや今しばし聞定めてのちにても遅からじと申しかばさすが老功のものゝいふハあり景勝も心ならねど延引さられけるこそ是非なけれ然る處に直江山城守兼續馳來りて何とて御出馬延引なし給ふぞや大田切口の森勝蔵軍に勝ながら夜の間に陣拂して河中嶋へ引返し候然バ風説實事と覺え候いづれにも宮崎まで御出馬候べ

必定御方勝利となるべく候と申により景勝大に喜びさらバ打立もの共とて都合其勢一万三千餘騎宮崎さして發向す柴田修理進勝家ハ魚津の城に佐久間久右衛門同源六を殘し置其身ハ諸軍に先立揉にもんで馳登る前田又左衛門尉利家父子徳山五兵衛直政ハ能州へ立寄いさゝか隙取しかども佐々内藏助成政柴田伊賀守勝豊佐久間玄蕃允盛政ハ勝家に後れじと思ひ〳〵に陣拂ひしたり此事宮崎表へ聞えしかバ畠山齋藤石動の面々魚津表へ馳着てこれおちや勝家ハ發足をし跡なりしかども佐久間兄弟鐵炮を射出して支えけるを宮崎勢案内ハ知たり短兵急に攻立くなしければ佐

久間兄弟忽ち攻破られつべく見えし處に上杉景勝の
先鋒直江山城守兼續三千餘騎本莊出羽守二千餘騎岡
野左内等千餘騎野にも山にも満々て押寄すれバ佐久
間兄弟彌いきほひなくかの勝家に追付てともかくも為
べきものをと思ひ定め城を焼てぞ落たりけり上杉勢ハ
魚津の城を取かへし息をも継ずに追掛しかども前田
孫四郎利長が能登國へと後れバせに引たる残見かけ
鬨を作りて攻近付バ佐久間玄蕃允取てかへし前田を
あひうける上杉勢ハ玄蕃に向て鐵炮を打かけ無二無
三にせり付しかども玄蕃允も此處にて手間取上方の
軍に後れてハとおもひければ如何にもして上杉勢を引

離んとあせりけるにぞ暫時あらそひて山の尾崎へ取上る
佐々内藏助ハ上杉勢に追掛られしかども元より合戦
を好まねバ鐵炮軍のみにして鎗をバ合さず柴田伊賀
守勝豊これを見て佐々が勢を引上させんとおもひしか
バ上杉勢の左にかゝり鐵炮をうちかけ鬨を作りて攻たり
かゝれども上杉勢佐々をすて柴田にかゝつて戦ふこと
なし柴田も元より早く引上んとおもひけれバ上
杉勢勝に乗てぞ追掛たり直江本莊齋藤畠山石動先度
の耻辱を雪ばやとて戦死をもし傍輩の幽魂をもなぐさめ
よやと聲々に呼はり切てハ突々てハ切猛火の
野草を焼ごとく息をも継ず間もなく攻しかども日すでに黄

昏に及びしかバ両陣引退て休息なし柴田勢ハはじめに
て軍をむかへとありけれバ夜のまに爰を引挙んとお
もひ陣處く小焼草多く積立残しおいて上杉勢の越来べ
き路次のつまり〳〵に敷おちてそのうち一度に火をか
けしかバ烈火次第に燃つのり白晝の如くなりし時に
一勢く引つけて上方筋へと馳上る上杉勢ハ火の手に
驚き是ハ佐々柴田佐久間の兵士等が夜込をするよと
なりひしにより兵粮つかひ馬草かひ鞍かさめしてて待
しかども更に寄来る勢なし餘りに事に待くたびれ
逆寄に寄て見てバいまだ在家を毀ちて大路に並べそれ
へ火を掛しかバ進まんとするに猛火炎々たり火をた

めしく追かくるほどに夜ハほのぐと明にけり上杉
勢ハ牙をかみ遅なりしと悔しがりけり然とてさきまで
も延まじきぞ追かけて見ずやと鞭を挙て追行ど朝霧
の絶間よりちらうに旗の手なびき合馬を早めて二三
百騎ばかり我先にと馳るほど上杉勢ハしきりに追か
け追つめんとあせれども柴田勢更に見えずなりしば馳
たりしかバさまでなかとて上杉方も勝閧あげて引返
しを勝家ハ只一騎眞先に進んで急ぎしかども馬弱く
く幾匹となくのり替て打ちれバ續く勢もなし溝口半
左衛門尉諸侍をまねけまし引かけ打せしかども若狭
國に入りとふたゞ三百ばかりぞつゞきたり勝家なか

てら急ぎしが兵士なけれバ為方なく後陣の勢をまちそろへんため若狹國小濱に逗留をし處へ佐久間が飛脚到着して上杉勢に跡を志たはれ殆難義の由くらしく注進したりしかバ勝家大に驚きかくては上京するとも明智に向く何とさん前ハ明智の勢つよく後ハ上杉の大勢に跡を志たはれ我本城をとらもなバゆゝしき大事なり進退こゝに極まりたりとて越前へ引返し上杉の手當を堅くしその後清洲へ參會し大將軍を立て後明智を退治すべうけりと決着し小濱より北の庄へ引返し跡に殘せし佐久間德山をもくちんと加賀越中の堺まで打て出れバ直江山城守齋藤畠山石動の三人が前田佐久間とかけ合せ火水になりて戦ふありされ共上杉勢ハあまりに急ぎて追うけし事なるゆへ兵粮運送に手間取て加賀國へハ打入ず勝家これを見て前田德山をよび集めいそぎ上方へ打てのぼるべしと途中の合戦その詮なしと諫めつく夜の間に人數を引上さて上杉勢も足長く加賀越前まで追うけんも如何なりとまづ本國へ引かへし重ねて切て上るべしと評定一決しこれより後ハ追もせざりけれども勝家六月十六日の暮がた江州梁箇瀬へ着陣しける時十三日に明智光秀山崎にて羽柴筑前守に討破られ小栗栖を脫るとて土民のために討れしを筑前守が沙汰として田口の日岡に獄門にかけしと迄聞へしかバ只今上京その詮なしづ清洲へ赴き評定すべしとて清洲へこそむかひけれ

重修眞書太閤記八編巻之六　終